親密性の創出

——18・19世紀フランスにおける自伝行為の社会性——

Inventing Intimacy:

Autobiographical Acts and their Sociability in Modern France

葛山 泰央

KATSURAYAMA Yasuo

“Autobiographical acts” not only describe or narrate a particular individual’s life but also embody the norms and values acceptable to their (imagined) readers’ community. Considering their own sociability, they have to be understood, not as a retreat or withdrawal from the public sphere into privacy or secrecy, but as a prefigured invention of social relationships (i.e., bourgeois public sphere) which supposes dynamism rather than opposition between public and private life. This paper aims to examine the historical interplay between autobiographical acts and their sociability, through various forms of self-narratives (confessions, exemplary autobiographies, novels of development, intimate journals, epistolary writings, etc.) in eighteenth- and nineteenth-century France, through figures or representations of adolescence, as well as through double trust in the veracity of language and the authenticity of self under which conditions they invent intimacy.

自伝の発話行為は、或る個人に独特の人生の軌跡を描き出す事に加え、当の行為・物語を受容する集団に共有されうる規範・価値観をも描き出すものである。従ってそれは社会的結合からの撤退、内的領域への自閉的逃避であるどころか、逆にその撤退や逃避の身振りの中で、一定の社会関係を先取的に創出するものと言える。

本稿は、近年の社会史研究・言説分析の成果を踏まえつつ、このような意味での自伝行為の社会性を、18・19世紀のフランスにおける様々な自己物語の諸形態——告白、模範的自叙伝、教養小説、内的日記——やそこに描き出された青年（期）の表象を巡る諸関係のうちに探る事にしたい。また、これらの諸形態や表象が親密性の創出を促した事や、それらを支える条件として言語の真実性や真正な自我に対する信頼があった事をも併せて論じてみたい。

1. 自伝行為の二重性

自伝、即ち自分自身（の人生）に関する真実を伝える発話行為は、常に既にそれが伝えられる宛先の想定を伴う。この宛先は、発話行為の始動する状況に応じて様々な仕方で想定されるが、そこで発話行為は、その都度宛先を想定しながらも当の宛先に拘束されたものとして姿を現す。換言すれば、そこでは発話行為の形態が宛先を想定・規定するだけでなく、想定された宛先が発話行為の形態を逆規定するもの、発話行為に対し先在的なものとして了解されるのである。従って、本稿での関心は、自伝の発話行為の類型（[Lejeune；1975：18]）を再構成する事⁽¹⁾ではなく、むしろ発話行為の形態から出発しつつ、宛先や

読者の想定を通じてそれが同伴させる社会的結合sociabilitéの様態を浮かび上がらせる事、更にはその歴史的・社会的変容を記述する事にある。自伝行為の形態を通じて想定される読者、更には、そのような読者から構成される空間とは如何なるものであったのか。特に18世紀末以降、「市民的公共性」[Habermas；1962=1973]の領域から‘距離を取る’自伝行為は、他ならぬこの距離化の操作の中で、いかなる空間に向けた投企であり得、またいかなる関係性の様態を創出し得たのか。

自伝行為は、自分自身の人生に独特の軌跡を描き出す事に加え、当の物語を受容する集団に共有され得る規範・価値観をも描き出す。この意味での模範exempleとは、自伝行為の‘伝統的’機能の一つであるが、この自己教訓的発話行為は、規範・価値の体现者としての自己を創出するのみならず、当の自己が実効的なものとなるような空間、想定された読者を担い手とするような（読者）共同体をも創出する。従って、発話行為がいかに関‘自閉的な’様相を帯びるにせよ、またその宛先を「絶対的読者」としてしか想定出来ないにせよ、自伝には自己の真実が伝えられる空間に関する想定が含まれるのであり、発話行為がいかなる形態を取ろうともこの事は変わらない。要するに、自伝行為とは、個人化・個別化された軌跡を描き出す中で、常に既に想定された読者から成る共同性を仮設するのであり、またそれは、或る個人に関する証言になることに加えて、当の個人が内属する（と了解され得る）共同性に関する証言にもなる。それ故、自伝行為が社会性からの分離を目指すときでさえ、そこには必然的に、別次元の社会性が想定されるのである。

「教会に避難する人々の場合であれば、沈黙を守る事も出来る——なぜならば、その場合に教会は、彼等の沈黙を正当化するために、彼等の名の下に、聖人や学者の口を通して語るからである——が、しかし自己以外には正当である事の根拠を持たないルソーは、決して沈黙の世界に入る事は出来ないであろう。彼の孤独の真実の意味を決して説明し終わる事はないが故に、彼は決して語り続ける事を止めないであろう」[Starobinski；1971=1973：65-66]（強調は引用者）。ルソーの『告白』（1766-70）は、共同性から孤独のうちに‘撤退’するまさにその中で、自分以外の何者をも信頼出来ないが故に、逆に彼自身に対して沈黙する事を禁じ、語り続ける事を要請するものであるのだが、そこでは、共同性に対する不信感が言語に対する信頼感と表裏一体を成している。公領域からの撤退は必ずしも言語からの撤退を意味せず、むしろ言語は私領域に領有される中で新たな力能を賦与される⁽²⁾。言語は「真正な自我」[Starobinski；op.cit.：322]との間に内在的連関を持つものとして了解され始める。言語の真実性に対する確信と相即的に、あるいはこの確信に依拠する中で、新たに信頼の対象とされ始めたこの関係性の様態とは、いかなるものであったのか。

2. 自伝契約と真正性の言語

ルソーの自伝行為の特徴は、彼が繰り返し持ち出す、或る隠喩のうちに凝縮された形で表現される。「肖像画[自画像]（auto-）portrait」の隠喩がそれだ。『告白』の最初の序文の中で、ルソーは「自分はいわば暗室の中で仕事をするようなものだ」と述べている。「他の書物と同様に入念に書かれた書物を仕上げようとするのであれば、私は自分を描写する事なく、むしろ自分を飾り立てる事であろう。しかしここで問題なのは私の肖像mon portraitなのであって書物un livreではない。私はいわば暗室la chambre obscureの中で仕事

をするようなものだ」[Rousseau ; 1766-1770→1959 : 1154] (強調は引用者)。この箇所を持ち出される「暗室」とは、一種の視覚装置 (の隠喩) であり、それは「私の肖像」を描き出すための道具 (の隠喩) である。しかしここで注意しなければならないのは、「私の肖像」や「暗室」といった一連の視覚的な隠喩が、何よりもまず「書物」や「文体」⁽³⁾ といったエクリチュールの効果を指示するために持ち出される事だ。ここで引き合いに出される視覚装置は、エクリチュールの装置によって呑み込まれてしまう。しかもそれは、エクリチュールが「肖像」のもたらず視覚的現前の代用品になる事をも意味する。即ち、視覚的現前 (やその欠如) は、エクリチュールによって代補される事になるわけだ。ルソーはこの序文以前にも、自分自身を書く事をしばしば「肖像画」を描く事に喩えている。「自分を描いたときには、肖像画がたとえ似ていなくても、いつもうまく描けているものです」[ドン・デシャン氏への書簡]。「私は飾り立てる事なく、また遠慮する事もなく、自分を描くつもりです。自分で見ている通りの、在るがままの私をお目にかけるつもりです」[マルゼルブ氏への書簡] [Rousseau ; op.cit. : 1137]。さらに、『告白』の序文にはこう書かれている。「これこそは自然のままに、自然のまったき真実のままに精確に描き出された、唯一の人間の肖像 *le seul portrait d'homme* であり、このようなものはこれ以前にはなく、またこれ以後にもないであろう」[Rousseau ; 1766-1770=1965 : 9]。ルソーにおいては、描く事と書く事がしばしば入れ替わっている。つまりテキストは肖像画であり、肖像画はテキストなのだ。彼は「自分で見ている通りの、在るがままの私」を伝えたいと願う。あるいは「自然のまったき真実のままに描き出された、唯一の人間の肖像」を呈示したいと願う。「肖像画がたとえ似ていなくても」と述べられる事からも分かるように、かくも強烈な願望の形でルソーが問題にするのは、あらかじめ実在する個体との間に打ち立てられる類似性ではない。彼にとって「モデルに似ていない自画像」というものは存在しないからだ。類似性が打ち立てられるとすれば、それは表現された肖像の中ではなく——それは決して完全には表現されない肖像であるのだから——「言葉の内なる自我の現存」の中に求められるべきなのである。自画像は、対象としての自我の「忠実な模写」ではなく、「自己探求という行為の生きた軌跡」となる。「私とは私自身に対する私の探求である」[Starobinski ; op.cit. : 320] (強調は原著者)。

自伝行為にみられる肖像画・自画像の比喩は、物語行為があらかじめ実在する事柄に照らした真実の領域を離れ、「真正性」の領域に移行した事を意味する。「自己像を変形させる事で、彼 [=ルソー] はより本質的な現実を明らかにする。その現実とは即ち、彼が彼自身に対して注いでいる視線であり、自己像を変形させる事でしか自己を把持する事が出来ないという彼自身が陥っている不可能性である。(…) この全体が、より完全な、しかし (あらかじめ実在する事柄に照らした) 検証の慣習的な法則からは逸脱するような、一つの真実を構成する。われわれはもはや真実 [=本当の物語 (内容) *histoire*] の領域にではなく、真正性の領域、真正なる物語行為 *narration* の領域にいたのである」[Starobinski ; op.cit. : 319-320] (括弧内・強調は引用者)。この「真正性」の法則は、言葉に対して、あらかじめ実在する事柄を再生産する事ではなく、「その自由で連続的な発展の中で自己の真実それ自体を生産する事」を要請する。言葉は自画像を描く際に用いられる「鏡」の役割を果たす。それは自己の「真正な」像を映し出すための「透明な媒体」になるのである。言語のこのような媒体性に依存する中で、自画像の制作は「理想的な交通形態」の仮設を

含む事になる。「私の性格を在りのままに描き、一切の本当の動機を語る」手紙の中で、ルソーが同時に「親密な友情l'intime amitié」の領域を想定している点に注意しよう〔マルゼルブ氏への手紙〕[Rousseau;op.cit.:1132] (4)。あるいは、彼が『告白』の冒頭部分で次のように述べている事も想起しよう。「私は自分の同類mes semblablesに向けて、一人の人間を自然のまっただき真実において呈示したい。そしてこの人間とは私自身である」[Rousseau;1766-70=1965:10]。これらの場面で、自画像の隠喩に身を委ねる事は、おのずからこの親密圏に組み込まれる事を意味する。なぜならば、自画像の隠喩がその効果を発揮するのは、この親密圏においてであるからだ。自分自身を書く事を「肖像画」を描く事に喩えるとき、そこには、‘来るべき自画像’の約束が信じられた領域、あるいはこの領域を包み込む「親密な友情」や「自分の同類」——ここで「同類semblables」とは、外的な類似性ではなく、内的な類似性を指示する言葉である——に対する期待、‘親密性’や‘内的な類似性’によって特徴づけられた領域に対する期待が込められているのである。しかも、既に示唆しておいたように、自分自身を書く事を自画像を描く事に喩えるルソーの試みは、自己の視覚的現前をエクリチュールによって置き換える事を正当化しようとする試みに他ならない。彼が「肖像画」の隠喩を持ち出す中で、自分の「全てを語る」事を目指すのは、たとえ視覚的な隠喩に訴えてでも、エクリチュールによって現前を代補しようとするからであり、かかる隠喩の力によってこの代補それ自体を正当化しようとするからである。但しこの試みは、根本的に「言葉」——パロールを代替するものとしてのエクリチュール——に依拠するものであるが故に、不完全性を回避する事が出来ない。「言葉paroleは媒介の道具としての役割を続けながらも、直接的な体験の場となる。(…)この言語はもはや古典的な意味での『論述discours』とはいかなる共通部分も持たない。それははるかに横柄で、はるかに不安定なのだ。一方で、言葉とは真正なる自我である (la parole est le moi authentique)。しかし他方で、言葉とは完全なる真正性はいまだ存在しない事、十全なる状態はいまだ獲得されねばならない事、証人が同意ないしは承認を拒否するならば何一つ確実でない事を指し示している」[Starobinski;op.cit.:322] (強調は原著者)。ルソーの自伝は、もはや書き手と読み手との間に‘第三者’として介在する真実に関して読者の「同意ないしは承認」を求めるようなものではなくなっている（それが「真正性」という言葉の意味である）。書き手は自らのエクリチュールによって自分自身を指し示し、自らの‘個人的体験の真実’に関して読者の「同意ないしは承認」を求めなければならない。ルソーの自伝行為が「肖像画」の隠喩を通じて到達したのは、「真正性」の次元であった(5)。しかしその行為は言葉に本質的に依存するが故に、自画像それ自体は不完全なものに成らざるを得ない。換言すれば、真正な自己の像は「肖像画」のように一挙に与えられねばならないのに、それは言葉に依存するものであるが故に、絶えず‘不完全な’状態に留まらざるを得ない。こうして「肖像画」が与えられる瞬間は（原理的には）無限に引き延ばされる事になる。そして「肖像画」それ自体もまた、絶えざる加筆や修正を余儀なくされる事になるのである。

ところで、近年の社会史研究の成果によれば、18世紀末から19世紀にかけての時期に、感情表現の変化と相即する形で、新しい内面性の形態が成立したとされる。（涙を流す事などの）感情表現が目指すのは、もはや‘至高の瞬間に感情を共有する事’ではなく、‘感情そのものの真実性に到達する事’である。それが表現する内面性もまた、甘美な瞬

間の直接性の中で共有されるものではなく、絶えず動揺する意味の中で観察され解説されるものとなる。要するに、「感情の真実性」の時代、「感情の極小化された変化」の時代が到来したのであり、そこで自己や他者の感情および内面性の理解はもはや一定のものではなく、あたかも複数の解釈に委ねられたものであるかのように姿を現す事になったのである（[Vincent-Buffault;1986=1994:185-186]）⁽⁶⁾。感情理解のこのような変化は、新しい内面性とそれを把持しようとする新しいエクリチュールの変化と相即的であった。例えば、「内的日記journal intime」は自分の感情や自分が接する人の感情を、一日の私的な出来事の中で、あるいは他者の感情の解説として分析することを可能にした⁽⁷⁾。また、友人関係における書簡の交換において、「親密な書簡correspondance intime」が姿を現し始めた事にも象徴されるように、伝統的には、経済的な贈与・交換に付随する役割や、礼儀作法を伝達させ拡散させる役割を果たしてきた手紙の中に、次第に個人性内部の連鎖を描き込む手紙、宛先に対する（無限の）期待によって特徴づけられた手紙や、宛先そのものが不在であるような手紙が姿を現すようになったのである（[Chartier;1991] [Vincent-Buffault;1995]）。これらの感情描写やエクリチュールは「自己や他者に対する徹底的に刷新された視線」の存在を指し示している。この新たな視線を支える親密性intimitéの準拠枠は、公共性や公開性の領域からの距離化に特徴づけられた自伝行為といかなる関連を有していたのか。

この問題を考える上で注目すべきなのが、自伝の備える契約的構造、即ち「自伝契約」[Lejeune;op.cit.]である。この契約は、自分自身（の人生）の真実を伝える事を他者・読者との間で約束する事を意味する。そこで、想定された他者は理念的に先取された読者の資格において発話行為を拘束する。つまりこの契約の下で、自伝は、想定された読者によって拘束された発話行為、一種の‘自己拘束的な’発話行為として姿を現す事になる。このように自伝契約が自己の真実を伝達する事を約束する中で、当の約束が果たされるべき宛先や読者の創設を伴うことから分かるように、そこで契約を実効的なものにする条件は、‘想定された読者に対する信頼’と‘発話の言語に対する信頼’の二つである。ここでこれら両者を区別すれば、自伝行為が、想定された読者に対する信頼を、言語の真実性véracitéに対する信頼、言語の真実性に対する自体的承認に従属させる形で、即ち、いかなる読者共同体や社会的結合を想定し得るかという問題を、発話の言語はいかに‘真正なもの’足り得るかという問題に帰着させる形で了解している事が分かる。この了解の下で、公領域に対する信頼を解除した後にも、言語に対する信頼を維持し続ける事が出来る。しかも、想定された読者を「真正な自我」の相関者として、「親密な」宛先として把持する事が出来る。但し、‘言語内在的なもの’として了解されるこの真実性に対する信頼、即ち「言説に内在的な、語る者と語られる事柄との間に想定される本質的な帰属関係」[Foucault;1976=1986:81]は、それ自体、歴史的・社会的な構成物として把握される必要がある。公領域に対する信頼と言語の真実性に対する信頼とが分離された形で維持され始めた事——しかも分離それ自体を曖昧化する仕方で維持され始めた事——自体が恐らく新しい出来事であったからだ。このように、或る種の発話行為の準拠枠が「親密性」に移行した事は、公領域に対する信頼とは独立に把握された、言語に対する信頼に基づくものであり、従って親密性の問題とは、何よりもまず、「真正な」言語、あるいはそれと不可分に結び付いた「真正な自我」の問題なのである。

3. 親密性の専制

親密な関係性が、公領域に対する信頼とは独立に維持されるような、言語の真実性に対する信頼の中から醸成されるとすれば、それはいかなる表象に支えられる中で、親密圏の形成・発展を促す事になったのか。この問題を考えるために、ここでは、19世紀における青年jeunesseの表象を巡る諸関係に触れておきたい。それは、公共圏と親密圏との理念的葛藤を最も先鋭化させる中で、親密性が姿を現す戦略的拠点であったからだ。青年の表象は自伝行為の展開と切り離して考える事が出来ない。というのも、青年期adolescenceは何よりもまず自伝行為の中で分節化され、またそれを巡る回想は、自伝行為に独特の魅力や個性化の力を与える（と了解されてきた）からだ。青年の表象とその周囲に編成される諸関係——即ち、家族関係・友愛関係・男女関係・社会関係、更には自己の自己自身に対する関係等——の言説化に触れる事で、この表象やそれと関連する物語行為の中で、親密性がいかに想像され形成されたのかを示唆する事が出来る。

近年の社会史研究の成果によれば、19世紀に青年に対して注がれる視線は、新たな形態の自己統御（特に性的統御）に加え、彼等のうちに「青年期固有の身体性を獲得させる認識」や「他者と自己自身とを区別する同一性の意識」を産み出した。また、それに相即する形で、個人を取り巻く社会的結合は当の個人の発展・形成に連動するという了解が成立する。‘男性と女性’‘若者と老人’等の諸範疇から編成される市民社会、その中で戦略的拠点に据えられた個人のうちに読み込まれる‘人生航路’の観念の中で、その開始点は最も期待と不安に満ちた時期として表象される。社会的結合はもはや固定化された仕方での自伝行為の条件を形作るものではなく、他ならぬ自伝行為を通じて創出されるものと了解される。それは自伝行為に先立つものとしてではなく、発話行為の過程を通じて、当の発話者（の属する集団）を組み込むものとして創出される。読み書きの習得過程や職人としての形成過程を模範的に呈示する‘労働者の回想録’や、青年の社会における様々な葛藤を通じた成長過程を主題化する「教養小説roman d'apprentissage」の流行はこの了解に対応している。これらの物語行為が目指すのは、自己形成が一つの見本となるような社会的結合の創出であり、様々な社会的結合を克服する中で理想的な関係を創造する事なのである。更にこれらに加え、青年たちが家庭や独身者の施設の中で、自分の私生活を維持し創出することを可能にした‘個人的現実逃避’の諸形態が存在する（自伝や書簡や小説等）。学習時間や消灯時間に、あたかも管理された時間を盗み取るかのように、小説を読み、手紙を書き、自己制御から自己主張への転換となる「内的日記」を綴ることは、彼等が自分の内的領域を自分自身のものにする方法であった。そこには19世紀を通じて絶えず新たに発見され深化され再構築される自己の表象をみることが出来る [Perrot;1987]。

このように、親密性を自己の表象との関連で発現させ、執拗に反復させる事になったのは、‘親密性の儀礼’とも呼ぶべき過程である。以下では、この儀礼の構造を考える事にしたい。そこでまず「親密性intimité」を操作的に定義するならば、それは特定の他者との関係性、あるいはそのような他者との「近接性proximité」や「親近性familiarité」、関係の密度を選択的に強化させ増大させる様態である、と言える。但し、この意味での親密性は、単なる「近接性」や「親近性」からは厳密に区別されなければならない。なぜならば、この場合に、親密性とは、相互に秘密を保持し合う主体——「親密性」の語には「内面性」の意味が含まれる——としての近接性を、即ち、相互に近接し合う中で、秘密を保持し合

う事に対する確信をますます増幅させる過程を指しているからだ。

ここで注目すべきは、相互に近接し合う事と秘密を内面的に保持する事との間に存在する、一種の循環的な関係である。「親密な」関係の下で、自らが秘密の主体であるという認識や了解は、当の秘密の保持を他者との間で相互に確認し合う中から得られるのであるが、秘密保持の相互確認を通じた、この主体性や近接性に対する感覚は、そこで確認されるはずのもの、即ち、相互が秘密を保持し合う主体であるという認識や了解、によって予め支えられてもいるからだ。「親密な」関係を根拠づけるはずのものは、関係それ自体の中で、関係それ自体の効果として産み出されなければならない。親密性とは、何ら持続的な様態ではなく、言説の儀礼的な反復を通じて不断に産出されるものである。しかも「親密な」関係性には、それを遂行的に表出し産出することに対する要請に加えて、関係性それ自体の反復に対する信頼や期待が込められている。この反復性とは、親密性にとって恐らくは欠く事の出来ない要素であり、この状態を産み出す過程そのものを、その都度未完結なものとして認識させ了解させる事になる。「親密な」関係性の言説的な構築に際して、しばしば書簡や日記の形式が用いられてきた事、あるいは書簡や日記の形式との関連でしばしば親密性が姿を現してきた事は、これらの形式が反復性をその本質的な特徴とすること——それは精確には、限定的・排他的な性格を帯びた交換関係が、互いの互いに対する期待を（原理的には）無限に増大させ得るような様態の事を指している。親密性の語がしばしば‘対幻想’に当たるものを意味する語として用いられ、‘性愛’に関連した意味を伴う事になるのも、その事と関連する——に基づいていたのかも知れない。実際に、19世紀のフランスでは「女性同士の間での（相互の秘密保持を目的とした）親密な書簡 *correspondance intime, secrète, féminine*」や「内的日記 *journal intime*」といった形式が実践的な次元で大量に出現し、しばしば文学的な表象としても姿を現すことになる（[Chartier; 1991:407-426] [Didier; 1976=1987]）のだが、これらの書簡や日記において、エクリチュールの反復的な性格と親密性との間には一体いかなる関係があったのか。親密性に対する認識や了解の上に、書簡や日記の反復性が手段的に持ち込まれる事になったのか、それとも書簡や日記の反復性の上に、親密性に対する認識や了解が寄生する事になったのか⁽⁸⁾。

親密性の儀礼には、更に別の問題もある。秘密を保持する主体として相互に近接し合うこの過程は（原理的には）未完結な過程である。この未完結性は次のような二重の仕方で発現する。即ち、秘密を保持する主体であるという感覚と、相互に近接しているという感覚とが、共に絶えず不安定化させられる事がそれだ。この過程では、秘密を保持する主体である事も、その資格において相互に近接し合う事も、共に不徹底なものに終わる。前者は秘密を保持する主体である事を相互に確認し合う存在としての「親密な」他者によって絶えず制御され、後者は各々の主体の内面性に対する「不可侵性」によってやはり制約されるからである。

しかしここで確認すべきは、まさにこの二重の不徹底性こそが、親密性を巡る言説的な儀礼のポテンシャルになっている、という事態である。内面的な秘密を保持しているという感覚も、相互に近接し合っているという感覚も、この言説的な儀礼から産み出される二重の効果であるのだが、それらはいずれも不徹底な形で産出され続ける。内面的な秘密を保持することはそれを相互に確認し合う他者の存在によって制御され続け、相互に近接し合う事は主体の内面性に対する「不可侵性」によって制約され続ける事になるからである。

しかもより重要なのは、この二重の不徹底性が在るからこそ、親密性の儀礼が継続的に反復される、という事である。何らかの関係性の構造が執拗なまでに繰り返されるのは、逆説的にも、その繰り返しの中で得られるはずのものが、まさにその繰り返しの中では決して得られないものであるからだ。親密性を創出するには、この儀礼を遂行する他はないのだが、この儀礼の中では、それがその都度実現するはずの親密性は決して実現されない仕掛けになっている⁽⁹⁾。それ故、‘透明性’や‘純粋な関係’に対する指向性は、仮にそれらが親密性の過程の中で想定されるものであっても、この過程の中では決して達成されない。いやむしろ、それらは最初から達成不可能なものである事が相互に・暗黙のうちに了解されているが故に、そこで想定される。親密性は、たとえそれが関係の‘透明性’を指向する場合でも、やはり関係それ自体の不透明性を前提にするのである⁽¹⁰⁾。それらの指向性は、他者性や対他性——この場合には「親密圏」の外部に想定される他者性の様態を指している——に関する、あるいは孤立状態に関する、一種の不在証明として想定されるのかも知れない。いずれにせよ、親密性がそれ自体として維持する事が困難な感覚である事には変わりはない。それを維持するには言説の儀礼的な反復が必要にして不可欠である。19世紀の「親密な書簡」や「内的日記」のエクリチュールにしばしばみられる反復強迫的な性格、あるいは執拗なまでの確認の身振りとは、親密性が二重の不徹底性、即ち、内面的な秘密を保持し合っているという感覚と、それを通じて相互に近接し合っているという感覚を条件にしながら成立している事の何よりの証拠なのである。

最後に、本稿での議論を要約しておきたい。親密な自己の創出を支えてきたのは、公的生活に対する信頼とは独立に維持された‘私的言語’に対する信頼である。この信頼は公領域に対する信頼からは切り離し得るものであり、またそのような形で維持し得る。それ故、公領域に対する不信感、直ちに沈黙を招き寄せるものではない。自伝行為の分節化は、公領域からの撤退よりも、むしろ「真正性の言語」に対する信頼の成立との関連で捉え返されるべきである。この信頼の下で、契約の効力は、何らかの社会的結合に由来する効力としてではなく、‘言語内在的な’効力として把握される。あるいは公領域に対する不信感が言語に対する信頼感を強化する事にさえなるかも知れない。19世紀を通じた、私領域における告白aveuの増大——confessionが公領域に相関的であるのに対して、aveuは私領域に相関的である——が意味するのは、まさにこのような事態であったと考えられる[Foucault;op.cit.] [Perrot;1987→1990:549-614]。「親密性」が強度を備えた形で出現した事の背景には、或る種の‘私的言語’に対する信頼と、それによって構築された「真正な自己」に対する信頼が関係していたと考えられるのである。

註

- (1) 人称性に準拠した発話行為の類型とそれらに対応する社会関係や社会的結合の類型を想定する事、それら両者の‘構造的な同型性’を想定する事は確かに可能であるかも知れない。しかしその場合にも、特定の社会関係や社会的結合との関連で、同じく特定の人称性を備えた物語が‘支配的’様態として姿を現す事自体を問題にしなければならない。換言すれば、‘自伝ジャンルの遠近法’それ自体を問題にしなければならないのである。
- (2) ミハイル・バフチンは、古代小説の類型を、その「クロノトpos [=小説における時空間]」の観点から論じた際に、古典古代が創出した伝記形式や自伝形式——特に、それらの根底に横たわる「新しい型の伝記的時間」と「(自分自身の人生行路を辿るために) 独自に構築された新しい人間像」——

に関連して、それらが‘公領域／私領域’というそれ自体近代的な範疇（区分）を相対化するものであった可能性を指摘している。「古典的な形態の自伝や伝記は、大声を張り上げて公衆に向かって発せられる具体的なものであり、社会的・政治的な出来事からは全く切り離された文学的・書物的なものではない。逆に、これらの自伝や伝記は、その種の社会的・政治的な出来事によって、その隅々まで規定されていた。現実の人間に対する公の礼賛、あるいは、現実の人間の・公の場での（自己に関する）報告であった。つまり、それらは言葉を用いての市民的・政治的な行為であった。従って、此处で重要なのは、それらの自伝や伝記の内的なクロノトポス〔＝描き出された生涯の時空間〕だけではない。むしろ、何よりもまず重要なのは、自己の生なり他者の生なりを描き出す行為が、公の礼賛や公の場での報告という、市民的・政治的な行為として遂行された、当の現実の外的なクロノトポスである」[Bakhtin;1937-38=1987:102-103]。この「現実の外的なクロノトポス」とは「広場（アゴラ）」である。「古代の広場」というこの「具体的で、いわば全てを含み込んだ」クロノトポスの中で、「市民の生涯の全体が開示され再検討され、全市民による公の検証が遂行された」のである（[Bakhtin;op.cit.:103-104]）。従って、その種の伝記や自伝、及びそれらの人間（あるいは人間像）のうちには「内密で私的なもの・秘密で個人的なもの・自分自身にだけ向き合っているもの・原理的に孤独なもの」は全く存在しないし、また存在し得ない。「此处では、人間はそのあらゆる面において外に開示されている。その全ては外に姿を現している。人間には『自分自身のために・自分自身にとって』と言えるようなものも、公の国家による管理や報告の対象にならないものも、何一つ存在しない。此处では、隅から隅まで、全てが公的である」。従って、このような条件下では「他者の生に対する態度と自己の生に対する態度との間には、即ち、伝記の視点と自伝の視点との間には、いかなる原理的な差違も有り得なかった」（[Bakhtin;op.cit.:104]）。これら一連の箇所で、バフチンが用いる「公」や「外」、あるいは「内密で私的なもの」や「秘密で個人的なもの」といった表現は、依然として‘公領域／私領域’という近代的な範疇（区分）を持ち込むものであるが、同時にそれらを相対化する事、それらの歴史的・社会的構築を問題化する事の可能性を示唆するものでもある。従って、本稿における‘公領域／私領域’の区別もまた、必ずしも厳密に用いているわけではないが、歴史的には、「市民的公共性〔公開性〕」の概念を踏まえたもの（言い換えれば、‘私的なものの公共性’を主題化するもの）として、原理的には、自伝行為が想定する社会的結合との関連で絶えずその境界を移動させるような相対的区別として把握されたい。

- (3) 引用に続く箇所、ルソーはこう述べている。「私はいわば暗室の中で仕事をするようなものだ。そこでは私の眼に見える特徴を精確に辿っていけばよいのであり、それ以外の技術は必要ない。文体に関しても、語る事柄と同様、私には既に決心がついている。文体を統一するつもりはないから、いつでも頭に思い浮かんだ文体を用いて、また気分に応じて、躊躇せずに文体を変える事にしよう。それぞれの事柄を感じるままに、眼にするままに（…）不統一にこだわらずに語る事にしよう」[Rousseau;ibid.]。
- (4) 「あらゆる事にびくびくし、社会生活のほんのちょっとした義務にさえ耐えられないのです。何かひとこと言わなければならない、手紙を一通書かなければならない、誰か人を訪ねなければならない、これらの事も、しなければならぬ事となると、私には拷問の苦しみです。ですから、私には、人々との日常的な付き合い *le commerce ordinaire des hommes* は厭わしい事なのですが、親密な友情 *l'intime amitié* は貴重なものとなっているのです。そこにはもう義務は感じられないのですから。人は自分の思い通りにしながらも、全てはうまくいくのです」[Rousseau;ibid.]。
- (5) この「真正な自我」の問題に関してスタロバンスキーは次のように述べている。「作者は作品によって自己を呈示し、その個人的体験の真実に対して賛同を求める。——ルソーはこのような問題を発見したのであり、近代文学の態度となるような新しい態度——ジャン＝ジャックが責任を負わされてきた感傷的なロマンティシズムの向こう側に——をまさに創り出したのである。自我と言語との危険な約束〔契約〕、つまり人間が自らを言葉 *verbe* にするような『新しい結合』を典型的な方法で実践した最初の人間だ、という事になるだろう」[Starobinski;ibid.]。
- (6) ジンメルもまた、近代における「友人関係」のモデルの変容を、〈完全な親密性〉から〈分化した

友人関係〉への移行として捉えている。「〔古典的な意味での〕友人関係は、〔性愛関係にみられるような〕献身の激烈さやその頻繁な不均衡さを欠くために、全人格を全人格と結び付け、心の閉鎖性を(…)より広範囲かつ持続的に解消するものである。但しこのような〈完全な親密性〉は、人間の分化が増大するにつれてますます困難になるであろう。恐らく近代人はあまりにも多くのものを蔽い隠さなければならないが故に、古典的な意味での友情を保持する事が出来ず、恐らく人格もまた、きわめて若い年頃を除けば、あまりにも独特に個性化しているが故に、完全に相互的な理解や受容といった事は不可能であろう。(…)それ故、近代的な感情様式は、〈分化した友人関係〉、即ち、その領域を人格のそれぞれの局面だけに持ち、しかも他の局面はそこには入り込まないような友人関係に対する傾向をますます強めてゆくように思われる」[Simmel; 1908=1979: 32-33] (括弧内・強調は引用者)。但し、この〈分化した友人関係〉は、‘全人格性’の代補を必ずしも排除するものではない。続く箇所では次のように述べられている。「〔この〈分化した友人関係〉は〕その関係には全く含まれない関心領域や感情領域に対して、友人たちが相互に踏み込まない事を要求し、従ってそこに踏み込む事は、相互的な理解の限界を、或る種の苦痛とさえ感じさせる事になるであろう。しかし、このように限界づけられ配慮に取り囲まれた関係も、それにも拘らず、全人格の中心から発しているものであり、たとえ人格の(周縁的な)局面だけに注がれるに過ぎないにせよ、〈人格の究極的な根底的活液〉とも呼ぶべきものによって浸透されているのである」[Simmel; op.cit.: 33] (括弧内は引用者)。

- (7) ヴァンサン＝ビュフォーは「内的日記」の歴史的・社会的特性に関して次のように述べている。「内的日記は、個人の私的空間、私生活と自分自身について書く事との間にある関係、19世紀に入念に作り上げられ、そして変化していく関係を取りわけ明らかにする。だが、それは同時に他者への視線でもあり、また他者の視線の自覚でもある」[Vincent-Buffault; op.cit.: 186]。このように、「内的日記〔親密な日記〕」は——(原則的には)出版しないものであるにも拘らず——自己の「私的空間」に対する視線と他者に対する視線を共に含むものである(但し「内的日記」の発生は1760年代とされるが、1860年代には‘作家の日記’が死後出版され始めるようになり、1880年代には「内的日記」の死後出版や生前出版が一般化するようになる)。この事はちょうど19世紀の前半に「内的な生活〔親密な生活〕vie intime」が‘私生活’の意味を、19世紀の後半に「親密な関係relations intimes」が‘性的関係’の意味を、更には、19世紀を通じて「親密性intimité」が‘私的で日常的には秘密にされるような特に個人的な領域’の意味をそれぞれ獲得した事に対応しているように思われる。
- (8) これらの問題との関連で興味深いのは、女性たちの書簡に対する「不可侵性」の歴史的・社会的成立である[Perrot; 1990]。19世紀を通じて次第に拡大する、女性たちの書簡に対する「不可侵性」の認識や了解は、しばしば女性たちの書簡に対する「家父長的な介入」を拒否するような権利の保証として把握され、しかもそれは女性たちの「市民化」と関連していた。換言すれば、女性たちの内面的な秘密の保持は、女性同士の(書簡を通じた)連帯によってその都度支えられていた、という事になる。
- (9) 「親密な性質を持つ関係の形式的な担い手は、身体的・精神的な近接性ではあるが、しかし、その近親関係〔近接性〕が同時的にも交替的にも距離や休止を含むものでなければ、このように親密な関係もたちまち親密性の魅力を失うばかりか、その内容も失う事になる。(…)〔このように〕相互の相互に対する知識は関係を積極的に条件づけるが、(…)何らかの関係が存在する場合には、むしろ関係はまた同じ様に一定程度の無知を前提とし、また極めて変化する事は勿論だが、一定程度の相互の隠蔽をも前提とするのである」[Simmel; op.cit.: 16-17] (括弧内・強調は引用者)。
- (10) それ故、確かに「人格的に分化したあらゆる関係においては、それぞれの側が他方の側に対して、言葉や活動を通じて自己を呈示する度合に応じて、関係の強度と色調も発展する」と言える。しかし「最も身近な人間でさえ、われわれに対するその魅力を高く保持するためには、その人間の〔少なくとも〕一部分が不明瞭あるいは不明白といった形式で提供されねばならない」[Simmel; op.cit.: 2, 38] (括弧内・強調は引用者)。

文献 (* 邦訳は文脈に応じて多少改めた)

Rousseau, Jean-Jacques (1761→1959) ‘Quatre lettres à M.le président de Malesherbes’, *Œuvres complètes*

- I, Paris ; La Pléiade : 1130-1147. = (1964) 今野一雄 (訳) 「マルゼルブへの手紙」『エミール (下)』(岩波文庫)、東京 ; 岩波書店.
- (1766-70→1959) *Les Confessions, Œuvres complètes I*, Paris ; La Pléiade. = (1965) 桑原武夫 (訳)『告白 (上)』(岩波文庫)、東京 ; 岩波書店.

*

- Bakhtin, Mikhail (1937-38=1987) 北岡誠司 (訳) 「古代の伝記と自伝」『小説の時空間』(ミハイル・バフチン著作集⑥)、東京 ; 新時代社、99-129頁.
- Chartier, Roger (Sous la direction de), (1991) *La correspondance : les usages de la lettre au XIX^e siècle*, Librairie Arithème Fayard.
- Didier, Béatrice (1976) *Le journal intime*, Paris ; Press Universitaire de France. = (1987) 西川長夫 (他訳)『日記論』、京都 ; 松籟社.
- Foucault, Michel (1976) *L'Histoire de la sexualité I ; La volonté de savoir*, Paris ; Éditions Gallimard. = (1986) 渡邊守章 (訳)『性の歴史 I : 知への意志』、東京 ; 新潮社.
- Habermas, Jürgen (1962→1990) *Strukturwandel der Öffentlichkeit : Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt am Main ; Suhrkamp Verlag. = (1973→1994) 細谷貞雄 (他訳)『公共性の構造転換 : 市民社会の一カテゴリーについての探究』、東京 ; 未来社.
- Lejeune, Philippe (1975) *Le pacte autobiographique*, Paris : Éditions du Seuil. = (1993) 花輪光 (監訳)『自伝契約』(叢書・記号学実践17)、東京 : 水声社.
- Perrot, Michel (1987) 'Quand la société prend peur de sa jeunesse en France au 19^e siècle'.
- (1990) 'Le secret de la correspondance au XIX^e siècle' in *L'Épistolarité à travers les siècles*, in Geneviève Haroche-Bouzinac (1995) *L'épistolaire* (collection contours littéraires), Paris ; Hachette Livre, 49-50.
- (ed.), (Philippe Aries and George Duby, general eds. ; Arthur Goldhammer, trans.) (1987→1990) *A History of Private Life IV : From the Fires of Revolution to the Great War*, Cambridge, Massachusetts, London ; The Belknap Press of Harvard University Press.
- Simmel, Georg (1908) 'Das Geheimnis und die geheime Gesellschaft' in *Soziologie : Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Dunker & Humblot. = (1979) 居安正 (訳)『秘密の社会学』、京都 ; 世界思想社.
- Starobinski, Jean (1957→1971) *Jean-Jacques Rousseau ; La transparence et l'obstacle* (suivi de sept essais sur Rousseau), Paris ; Éditions Gallimard. = (1973→1993) 山路昭 (訳)『ルソー : 透明と障害』、東京 ; みすず書房.
- Vincent-Buffault, Anne (1986) *Histoire des larmes : X^{VIII}^e-X^{IX}^e siècles*, Paris : Éditions Rivages. = (1994) 持田明子 (訳)『涙の歴史』、東京 ; 藤原書店.
- (1995) *L'exercice de l'amitié : pour une histoire des pratiques amicales aux X^{VIII}^e et X^{IX}^e siècles*, Paris ; Éditions du Seuil.

付記 : 本稿は、第71回日本社会学会大会・一般研究報告 I [1998年11月22日・関西学院大学] における配布原稿を加筆・修正したものであり、平成10年度・文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

(日本学術振興会特別研究員, 東京大学)